

序

編集委員会委員長 山岸 文雄

(国立病院機構千葉東病院呼吸器科)

日本結核病学会は大正12年1月に設立され、学会誌は大正12年3月に第1巻が創刊されています。そして、わが国の結核研究の発展、結核対策の推進、結核治療の向上等に多大なる貢献をしてきました。途中、第二次世界大戦による中断が2年間あり、昭和50年4月に第50回日本結核病学会総会が京都で開催されたのを記念して、昭和50年12月に、日本結核病学会50周年記念号が第50巻、11・12月合併号として刊行されました。この50周年記念号をひもといってみますと、執筆者はコラムを含めると100名以上にのぼり、わが国の結核病学の発展を担ってきた先生方が、わが国の結核研究の歩みを、かなり詳しい分野まで詳細に分類してお書きになった大変貴重なものと思われま

す。第50回会長の安平公夫先生がこの記念誌の序文で、「結核病学50年の歴史は、それに係りをもったすべての生命の、喜びと歎きの、誇りと悔恨の映し絵である。多くの人達が、その中で生き、生かされ、そして死んでいった。しかし、それだけではない。これはまた新しいものへの手導きであり、希望である。私達が結核病学会第50回総会を記念して本誌を編集することを決意したのは、会員諸氏が栄光あふれる結核病学の過去をではなくて、来らんとする未知なものに眼を向け、新しい冠をめざして力強い歩みを踏み出されることを願ってのことに他ならない」と述べています。

一方、国立療養所東京病院の島村喜久治先生が50周年記念号のあとがきで、「50年の学会の歴史の歩みの中で、いかに数多くの先輩たちが、その研究に、臨床に、いかに血みどろの闘いをたたかってきたことか。これは、その記録であるとともに、これからの結核病学、更には他の疾患の研究分野にも、大きな示唆を与えるものに違いない、と自負している」と述べています。

序文およびあとがきからもわかるとおり、お二人の先生、いやこの時代までの結核医療および研究に係わってきた先達の、結核の臨床および結核研究にける並々ならぬ思いが、ひしひしと伝わってくるようであります。

さて、昨年(昭和59年)の第85回日本結核病学会総会(京都)における編集委員会で、50周年記念号から大分時間が経過しており、また過去のわが国の結核研究についてお詳しい先生方がお元気なうちに、執筆をお願いして特集号を早く発刊したほうがよいのではないかと議論され、この特集号が発刊されることが決定しました。

そして編集委員会のなかに、この特集号のためのワーキンググループをつくりました。名誉会員の岩井和郎先生、志村昭光先生、功労会員の森亨先生、国立病院機構東京病院の永井英明先生にご参加いただき、どのような特集号とするか、どの分野をどの先生に執筆を依頼するのが適切か、執筆をお願いした場合に健康上の問題などを含めて書いていただけるかどうかなどについて話し合いを行いました。執筆は名誉会員および功労会員の先生方を中心にお願いしましたところ、健康上の理由などで

ご辞退された先生も若干いらっしゃいましたが、多くの先生方は、突然のお願いにもかかわらず、短い期間での執筆を快くお引き受けくださいました。この場をお借りしまして御礼申し上げます。

わが国の優れた過去の業績についての紹介は、50周年記念誌ではかなり詳しい項目まで分類していますが、今回は大雑把な分類として、執筆をお願いする原稿枚数のみを決め、内容の詳細については執筆者に一任するという形をとりました。

人物紹介は、第50回総会までの会長経験者で、かつ故人となった先生から、その先生の業績・地域などを加味してお選びし、かつその先生にできるだけ関わりの深い方に執筆を依頼しました。また可能なかぎり、お写真の掲載もお願いしました。

さて今回の記念号ですが、当初は特集号と考えていましたが、渡辺彰理事長もお書きになっているように、任意団体から一般社団法人となり、学会事務所の移転、結核・抗酸菌症認定医・指導医認定制度の発足等、新しくなった日本結核病学会を記念して、編集委員長の一存で記念号とさせていただきました。